

# 見知らぬ他者との相互作用が及ぼす心理的影響

## —通学時の経験を用いたフィールド実験—

針 原 素 子

### 1. 研究の背景と目的

都市に生活する私たちは、日頃、多くの見知らぬ他者の中で暮らしているが、見知らぬ他者と相互作用をすることは、まれである。Goffman(1963 丸木・本名訳 1980)は、見知らぬ人の間で行われる一般的な相互作用のあり方について「儀礼的無関心(civil inattention)」と呼ぶ。具体的には、「相手をちらっと見ることは見るが、その時の表情は相手の存在を認識したことを表わす程度にとどめ(中略)、次の瞬間にすぐに視線をそらし、相手に対して特別の好奇心や特別の意図がないことを示す(Goffman(1963 丸木・本名訳 1980), p.94)」ような、一般的な礼儀作法のことである。無関心に振る舞うことは、膨大な見知らぬ人どうしが行き交う都市生活を可能にするために必要なことである。しかし、高齢者や子どもなどに対してや、ある狭いコミュニティ内や、バーやリゾート、お祭りなど相互に自己を開放する状況ではあいさつや気軽な関係が築かれやすいし、また、相手がつまづいたりして体面を逸したときや、相手が明らかに助けを必要としているとき、反対に自分が助けを必要としたとき、あるいは相手にぶつかったりして迷惑をかけたときなど、それなりの理由があるときにも相互作用が開始される(Goffman(1963 丸木・本名訳 1980))。もし、無関心が必要以上に規範となった場合、そのような見知らぬ人どうしで相互作用を開始してもよさそうな場面なのにもかかわらず(あるいは相互作用を開始すべきときであるのに)、無関心が通される場面が多く生じる可能性があるだろう。

なぜ人々は見知らぬ他者と関わらないのか。Epley & Schroeder(2014)は、人々が本当にひとりでいることを好むためか、それとも、見知らぬ他者と関わることは本当はポジティブな経験なのに、ひとりの方がよいと誤解しているためかを検討するため、アメリカの都市における電車やバス等の公共交通機関利用者に対し、フィールド実験をおこなった。Epley & Schroeder(2014)の実験 1a では、朝の駅のプラットフォームで通勤客を募り、それらの参加者を3つの条件に振り分けた。つながり条件(connection condition)では、電車の中で知らない人とできるだけ長く会話するように教示し、ひとり条件(solitude condition)では、電車の中でひとりの時間を楽しむように教示され、統制条件では、ふだん通りに通勤するように教示した。実験参加者たちは、それぞれの指示に従って乗車した

後、渡された質問紙に回答してそれを返送した。結果は、つながり条件の参加者が、もっともポジティブな経験を報告していた。一方、同じ実験状況を実際に経験させずに、想像してもらって質問紙に回答してもらうと(実験1b)、つながり条件が一番ネガティブな経験として想起されることから、Epley & Schroeder(2014)は、人々は実際には見知らぬ他者に関わるとポジティブな経験になるのに、その相互作用の結果を誤解していると主張している。

では、この結果は日本においても再現されるであろうか。日本人は、アメリカ人と比べて、見知らぬ他者との相互作用が少ないことが分かっている。例えば、Harihara(2011)は、日本、アメリカ、韓国の地下鉄内の乗客の行動を観察し、日本人はアメリカ人、韓国人と比べて、見知らぬ他者どうしの相互作用が少ないことを明らかにした。また、Patterson, Iizuka, Tubbs, Ansel, Tsutsumi, & Anson(2007)は、街中の歩道で通り過ぎるときに、実験協力者が視線を投げたり、微笑みかけたりするフィールド実験をおこない、アメリカ人参加者は見知らぬ実験協力者からの働きかけに挨拶や笑顔で返すが一定割合いる一方で、日本人参加者はほとんどの人が応じないことを明らかにした。

これらの文化差を踏まえると、日本人が見知らぬ他者と相互作用した時の効果には2つの可能性があるだろう。一つは、Epley & Schroeder(2014)と同様に、実は相互作用をおこなえばポジティブな経験となるのだが、知らない人とは相互作用すべきでないという規範が強く、行動としては表れにくいという可能性であり、もう一つは、日本人は内集団と外集団の区別を重視する相互協調的自己観の持ち主であるため(e.g., Markus & Kitayama, 1991)、外集団メンバーとの相互作用はポジティブな効果をもたらさないという可能性である。そこで、本研究では、Epley & Schroeder(2014)の実験を日本において追試することを目的とした。ただし、前述の電車利用者をその場で募集し、車内で会話させるフィールド実験は、様々な制約上、日本では難しいため、Epley & Schroeder(2014)が実験2aでおこなったように、あらかじめ確保した実験参加者に対し、実験室に来る前に連絡し、公共交通機関を使った道中に実験指示に従ってもらい、到着と同時に質問紙に答える方法をとることとした。

Epley & Schroeder(2014)は、主な従属変数として、ポジティブ度と生産性を用いている。しかし、本研究では、生産性の代わりに、一般的他者や社会に対する肯定的な態度をもう1つの従属変数とする。ふだんは触れ合わない見知らぬ人と相互作用をおこなうことで、一般的他者や社会とのつながりが意識されると考えたためである。Sandstrom & Dunn(2013)は、スターバックスを訪れた客に、バリスタと話をするように指示する群、効率よく注文するように指示する群を比較し、話をした客の方がポジティブな感情になるのだが、それは社会とのつながりを感じるためであることを明らかにしている。もし、見

見知らぬ他者との相互作用が、他者や社会に対する肯定的態度につながるとしたら、アメリカ人に比べて低いと言われている日本人の一般的信頼 (e.g., Yamagishi & Yamagishi, 1994) について、日々の人々の相互作用のあり方から議論ができる可能性がある。

日本人において、Epley & Schroeder (2014) と同じ結果が得られるかどうかは自明でないが、ひとまず、同じ結果が得られるという予測のもと、以下の仮説を設定し、検討することとする。

仮説 1：見知らぬ他者と相互作用するよう指示されたつながり条件の参加者は、関わりを持たないよう指示されたひとり条件の参加者に比べて、その経験をポジティブに捉えるだろう。

仮説 2：見知らぬ他者と相互作用するよう指示されたつながり条件の参加者は、関わりを持たないよう指示されたひとり条件の参加者に比べて、他者一般に対して肯定的な態度を持つだろう。

## 2. 方法

都内私立大学の学生を対象に、登校時の通学時間を利用したフィールド実験をおこなった。Epley & Schroeder (2014) の実験 2a では、公共交通機関を使って実験室まで来ることのできる実験参加者を募集し、実験当日の朝、電話で実験操作の教示をおこなったが、本研究では、メールで一斉に教示をおこない、登校後に教室で質問紙に回答してもらった。

### 2.1 実験参加者

都内私立大学で 1 限に開講されていた社会心理学の講義の受講者<sup>(1)</sup>から募集した。複数ある自由参加のオプション課題の 1 つとしてこの実験を選択し、事前に教示連絡用のメールアドレスを提出した 95 名の内、実際に教示を受け取り、実験開始時間に集合した 74 名 (男性 32 名、女性 42 名、平均年齢 19.80 歳) を対象とした。

### 2.2 実験計画

見知らぬ他者との相互作用を独立変数とし、つながり条件、ひとり条件、統制条件の 3 条件に参加者を無作為に振り分ける参加者間要因であった。ただし、見知らぬ他者との相互作用がまれな日本人において、つながり条件の操作にうまく従えない参加者が出る可能性を考え、つながり条件に割り当てる人数を多くした。最終的に、それぞれの条件の参加者は、つながり条件 34 名、ひとり条件 19 名、統制条件 21 名となった。

見知らぬ他者との相互作用が及ぼす心理的影響

## 2.3 手続き

実験参加者から事前に取得したメールアドレスを3条件にランダムに割り当て、実験日の午前6時に一斉にメールにて教示をおこなった。

メールの冒頭で、実験参加は自由意志によるものであり、いつでも辞退できること、実験が終了するまで、友達どうして実験について話し合ったり、LINEやTwitterなどで情報を流したりしないようにという注意事項を記載してから、各条件に応じた教示をおこなった。実際に教示通りの行動をおこないやすくするため、教示をよく読んで、一度、通学途中のことをイメージしてから実践するように指示した。

条件に応じて、つながり条件はA、ひとり条件はB、統制条件はCという実験参加IDを記載し、覚えておくように指示した。具体的な教示内容は、以下の通りであった。

### A. つながり条件：

「通学の途中で、周りの人とできるだけ関わりを持つようにしてください。あなたにしていきたいことは、『通学途中で出会う人々を、一人一人の人間として見て、できるだけ深く関わること』です。」と教示した。どのような関わりを持てばよいか想像がつかない参加者がいる可能性を考え、道端ですれ違う人やコンビニエンスストアの店員、バスの運転手さん、駐輪場のおじさんなどとの具体的なやりとりの例を載せ、負担にならない範囲で、できるだけ多くのことを実践してみるように指示した。

### B. ひとり条件：

「通学の途中で、周りの人とできるだけ関わらないようにしてください。あなたにしていきたいことは、『通学途中で出会う人々をできるだけ意識せず、1人の時間を過ごすこと』です。」と教示した。

### C. 統制条件：

「いつもの通学と何も変えることなく普段どおりに通学してください。あなたにしていたきたいことは、『あなたが普段するとおりに行動すること』です。」と教示した。

いずれの条件でも、通学途中で友人に会った場合は、挨拶のみにとどめ、教室まで1人で通学するようにとの指示を付け加えた。Epley & Schroeder(2014)にならい、スマートフォンの使用などについては、特に指示はしていない。統制条件は、普段どおりの通学を指示しており、その条件と比較するためである<sup>(2)</sup>。各自、実験開始時間である8時45分(授業開始15分前)までに教室に登校し、質問紙に回答してもらった。全員の回答が終了後、デブリーフィングをおこなった。

## 2.4 質問項目

性別、年齢の他、以下の項目から成っていた。

### 操作チェック項目：

教示メールで条件ごとに割り当てた A～C の実験参加 ID を、「A」、「B」、「C」、「忘れた」、「メールを見ていない」の中から選択してもらい、メールでどのように通学するように指示されたか、自由記述で回答してもらった。

また、「あなたは今朝、普段の通学と比べて、どのくらい周りの人と関わりましたか」と尋ね、「－3. 普段よりずっと関わらなかった」～「＋3. 普段よりずっと関わった」の7件法で回答してもらった。中央の「0」には「普段と同じ」とラベルをつけた。

### ポジティブ度測定項目：

ポジティブ感情とネガティブ感情を測定するため、Diener et al.(2010)の SPANE(Scale of Positive and Negative Experience)の日本語版(SPANE-J：Sumi(2014))12項目を用いた。SPANE-Jでは、「ここ4週間に、あなたは次の気持ちをどのくらい経験しましたか」と尋ね、「前向きな気持ち」「後ろ向きな気持ち」「良い気持ち」「悪い気持ち」などの12項目に対して「ほとんどなかった」～「ほぼいつもあった」の経験頻度で尋ねているが、本研究では、同じ12項目を用いて「あなたは今、以下のような気持ちをどのくらい感じていますか」と尋ね、「1. 全く感じない」～「5. 強く感じる」の5件法で回答してもらった。

また、Epley & Schroeder(2014)にならい、普段の通学と比べ、その日の通学がどうであったかを「－3. 普段よりずっと楽しくなかった」～「＋3. 普段よりずっと楽しかった」の7件法で回答してもらった。

### 他者一般への態度測定項目：

Yamagishi & Yamagishi(1994)の一般的信頼尺度より3項目(「ほとんどの人は基本的に正直である」、「ほとんどの人は信頼できる」、「ほとんどの人は基本的に善良で親切である」)、用心深さ尺度より2項目(「この社会では、気をつけていないと誰かに利用されてしまう」、「人々はふつう、口で言っているほどには他人を信頼していない」)を、因子負荷量を基準に抜粋して用い、「1. 全くそう思わない」～「5. とてもそう思う」の5件法で回答してもらった。

さらに、社会とのつながり感を測定するため、Lee, Draper, & Lee(2001)の social connectedness scale から因子負荷量と日本語に訳した時の自然さを考慮して4項目を抜粋し、「世の中の多くの人は、親しみやすく近づきやすい人達だ(I see people as friendly and approachable.)」、「世の中の人々と距離を感じる(I feel distant from people.)」、「世の中のほとんどの人々は、自分と関係ないように感じる(I don't feel related to most people.)」、

見知らぬ他者との相互作用が及ぼす心理的影響

「世の中の人々に親近感を感じる (I feel close to people.)」と訳して用い、「1. 全くそう思わない」～「5. とてもそう思う」の5件法で回答してもらった。

通学途中の経験についての項目：

通学途中に、「誰かに話しかけたか」、「誰かから話しかけられたか」、「誰かとアイコンタクトをとったか」の3つについて、「はい」「いいえ」で回答してもらった。さらに「誰かに話しかけた」と回答した人には、「何人に話しかけたか」、「そのうちの何人が、話しかけに応じてくれたか(無視されなかったか)」を実数で回答してもらい、「応じてくれた人」「応じてくれなかった人」とのやりとりを自由記述で記載してもらった。

性格特性：

小塩真司・阿部晋吾・カトロニ ピノ (2012) の日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) の 10 項目を用いて外向性、協調性、勤勉性、神経症傾向、開放性の 5 つについて測定した(「1. そう思わない」～「5. そう思う」の 5 件法)。

### 3. 結果

#### 3.1 操作チェック

まず、各参加者の条件を確認するための実験参加 ID は、全員が回答しており、「忘れた」、「メールを見ていない」の選択肢を選んだ人はいなかった。また、その ID とメールで受けた教示についての自由回答との一致を確認したところ、つながり条件(実験参加 ID = A)の人は全員が「周りの人とできるだけ関わる」ということを書き、ひとり条件(ID = B)の人は全員が「周りの人とできるだけ関わらない」ということを書いていた。統制条件の人(ID = C)の中では 3 人だけ「普段通り」というキーワードが欠けている参加者がいたが、「一人で通学すること」「LINE や Twitter などでは情報を流さないこと」などその他の指示について正しく記述しており、問題ないと考え統制条件として扱うこととした<sup>(3)</sup>。

次に、つながり条件の参加者は、他の条件の参加者よりも、実際に他者と関わったかどうかを確認するため、普段の通学と比べて、周りの人と関わったかどうかを聞く操作チェック項目に、条件差があるかどうかを 1 要因の分散分析で検討した。等分散性が仮定できなかったため (Levene 統計量  $L(2, 70) = 5.56, p < .01$ )、ウェルチの分散分析をおこなったところ、条件間で有意な差が見られた ( $F(2, 39) = 25.05, p < .001$ )。多重比較の結果、つながり条件 ( $M = 1.35, SD = .95$ ) と他の 2 条件 (ひとり条件:  $M = -.61, SD = 1.14$ 、統制条件:  $M = .05, SD = .80$ ) の間に 1% 水準で有意な差が見られたが、ひとり条件と統制条件の間には有意な差は見られなかった。ここから、つながり条件の操作は成功していたと判断できる。ひとり条件は、統制条件とは差がなかったが、もともと日本人は普段から他者とは関わらない傾向があるため、統制条件とひとり条件の意味がほとんど同じであっ



たとえられる。

### 3.2 仮説検証

まず、仮説1を検証するため、ポジティブ・ネガティブ感情と、普段の通学と比べた楽しさからポジティブ度の指標を作成した。SPANE-Jのポジティブ6項目の平均値( $\alpha = .90$ )から、ネガティブ5項目の平均値( $\alpha = .83$ ) (ネガティブ項目からは、相関の低かった「心配な」を除外した)を引いたものを、ポジティブ感情得点とした<sup>(4)</sup>。このポジティブ感情得点と、普段の通学と比べた楽しさとの2つを標準化し、平均したものをポジティブ度の得点とした( $r = .55, p < .001$ )<sup>(5)</sup>。

つながり条件、ひとり条件、統制条件の間に、ポジティブ度の差があるかどうかを検討するため、一要因の分散分析をおこなった。その結果、条件の有意な主効果は5%水準では有意にならなかった( $F(2,70) = 2.65, p < .08$ )が、つながり条件のポジティブ度が一番高い傾向は確認できた(図1参照)。

各条件の教示にきちんと従えなかった人がいるために、条件間で差が見られなかった可能性もあるため、つながり条件にもかかわらず、誰かに話しかけた、またはアイコンタクトをとった、と回答しなかった6名、ひとり条件にもかかわらず、誰かに話しかけた、またはアイコンタクトをとったと回答した4名を分析から除外して再分析をおこなったところ、やはり有意な差は得られなかった( $F(2,60) = 2.22, p < .12$ )。

次に、仮説2を検証するため、他者一般への肯定的態度を表す指標を作成した。「一般

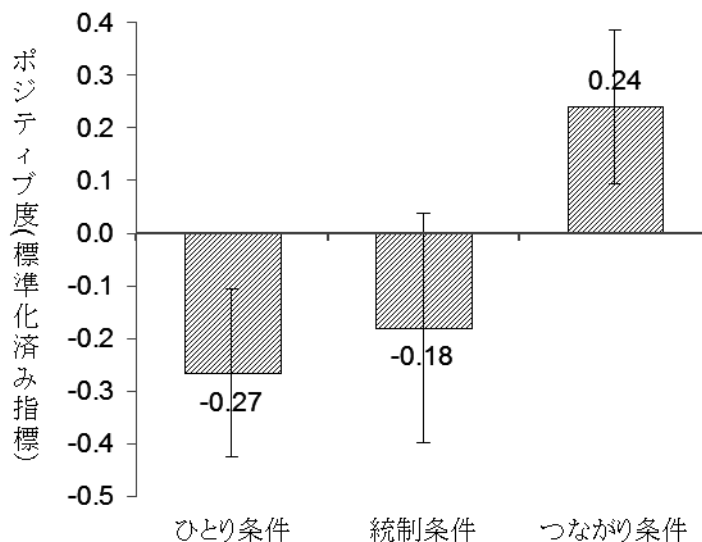


図1 条件ごとのポジティブ度  
(エラーバーは標準誤差)

見知らぬ他者との相互作用が及ぼす心理的影響

的信頼」3項目と「用心深さ」2項目の計5項目について、主因子法による因子分析をおこなったところ、固有値の減衰パターンに基づき1因子が抽出された。そのため、この2つは本来別の概念を測るものであるが、「用心深さ」の2項目を反転した上で、5項目を平均し、一般的信頼(非用心深さ)得点とした( $\alpha=.78$ )。この後、簡便のため、この尺度を「一般的信頼」と呼ぶ。

次に、「社会的つながり」の4項目についても、反転項目を反転の上、平均値を社会的つながり得点とした( $\alpha=.67$ )。このようにして作成した「一般的信頼」と「社会的つながり」の相関は十分に高かったため( $r=.47, p<.001$ )、この2つの変数を標準化の上、平均値をとり、「他者への肯定的態度」として分析に用いることとした。

つながり条件、ひとり条件、統制条件の間で、他者への肯定的態度に差があるかどうかを検討するため、一要因の分散分析をおこなった。その結果、つながり条件で最も他者への肯定的態度が高かったが(図2参照)、条件間の差は有意でなかった( $F(2,70)=0.93, n.s.$ )。

この結果は、つながり条件にもかかわらず、誰かに話しかけた、またはアイコンタクトをとった、と回答しなかった6名、ひとり条件にもかかわらず、誰かに話しかけた、またはアイコンタクトをとったと回答した4名を分析から除外して再分析をおこなっても同様であった( $F(2,60)=0.48, n.s.$ )。

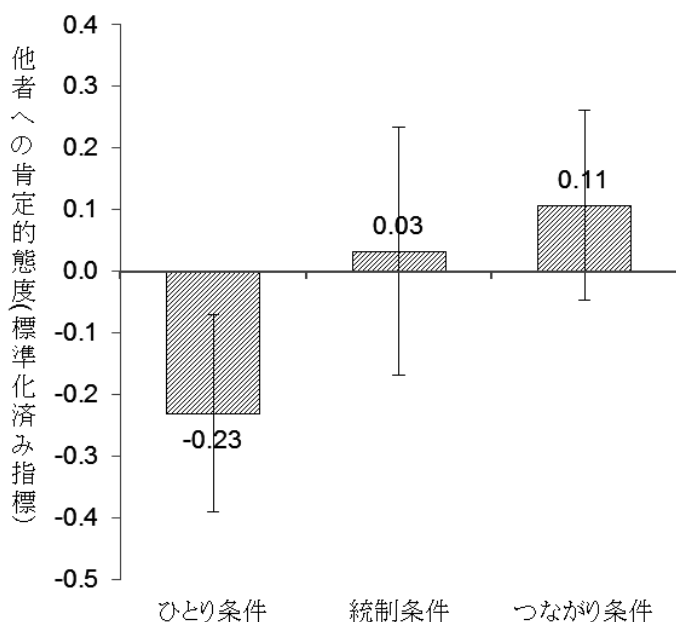


図2 条件ごとの他者一般への肯定的態度  
(エラーバーは標準誤差)



### 3.3 相互作用のあり方と個人差の検討

ここまでの結果は、予測と一致したパターンは示したものの、条件間の差が有意にはなかった。これは、それぞれの条件の中に、様々に異なる経験をした人が混在しているためである可能性がある。そこで、他者とどのような関わり方をした人が、経験をポジティブに捉え、他者一般に肯定的態度を持っているのかを検討するため、参加者の実際の経験の影響を分析した。

他者との相互作用の種類としては、通学途中に「誰かに話しかけたか」「誰かに話しかけられたか」「誰かにアイコンタクトをとったか」について聞いているため、それぞれをダミー変数にして分析に用いた(1=経験あり／0=経験なし)。条件ごとのそれぞれの相互作用経験率を見ると(表1)、当然、話しかけ経験率も、アイコンタクト経験率も、つながり条件に最も高いが、その他の条件でも話しかけやアイコンタクトを経験した人もいる(話しかけられ経験は、条件との関連が見られない)。そこで、ここから先の分析では、条件にかかわらず、実際に他者への話しかけやアイコンタクトを経験したこと自体の効果をみていくこととする。

表1 条件ごとの相互作用経験率

	ひとり条件	統制条件	つながり条件		
話しかけ経験あり	5.30%	14.30%	64.70%	$\chi^2(2)=24.49$	***
話しかけ経験なし	94.70%	85.70%	35.30%		
話しかけられ経験あり	10.50%	9.50%	6.10%	$\chi^2(2)=0.39$	n.s.
話しかけられ経験なし	89.50%	90.50%	93.90%		
アイコンタクト経験あり	21.10%	19.00%	55.90%	$\chi^2(2)=10.23$	**
アイコンタクト経験なし	78.90%	81.00%	44.10%		

\*\*  $p < .05$ , \*\*\*  $p < .01$

なお、話しかけやアイコンタクトをするかどうか等の経験には、割り当てられた条件の影響だけではなく、性格特性などの個人差も影響する。そこで、例えば話しかけ経験がポジティブ度に効果を持っていたとしても、それが話しかけ経験によるものなのか、そのような性格であることの効果なのかが分からない。そこで、ここから先の分析においては、性格特性、性別といった個人差を統制したうえで、相互作用のあり方が影響するかどうかを重回帰分析で検討した。

性格特性の測定に用いた小塩真司ら(2012)の TIPI-J は、外向性、協調性、勤勉性、神経症傾向、開放性の5つの特性について、2項目ずつ測定するようになっている。そこで、逆転項目を反転したうえで、それぞれのペアで平均値を算出し( $r = .69, .26, .48, .26, .33$ )、外向性、協調性、勤勉性、神経症傾向、開放性の得点とした。2項目間の相

見知らぬ他者との相互作用が及ぼす心理的影響

関は十分高いとは言えないが、小塩真司ら(2012)においても相関が低いまま算出されているため( $r=.59, .22, .38, .28, .39$ )、本研究でもこれらを変数として用いた。

まず、実験参加者全員に対して、性格特性、性別を統制した上で、話しかけ経験、話しかけられ経験、アイコンタクト経験の効果を見たのが表2の結果である。ポジティブ度については、有意な効果が見られた変数はなかった。他者への肯定的態度については、10%水準でアイコンタクトを経験した人のほうが他者に対して肯定的になるという弱い傾向が見られた( $\beta=.21, p<.10$ )のみであった。

表2 相互作用の経験が及ぼす影響

	ポジティブ度	他者への肯定的態度
話しかけ経験ダミー	.20	-.02
話しかけられ経験ダミー	.15	-.03
アイコンタクト経験ダミー	.03	.21 <sup>†</sup>
外向性	.11	.24 <sup>†</sup>
協調性	.14	.22 <sup>†</sup>
勤勉性	.00	.14
神経症傾向	-.01	.07
開放性	.18	.20
性別ダミー(0=男性/1=女性)	-.01	-.01
$R^2$	.17	.30 <sup>*</sup>
調整済み $R^2$	.05	.20
$n$	72	72

<sup>†</sup>  $p<.10$ , <sup>\*</sup>  $p<.05$

次に、実際に自分から話しかけた人のみを対象に、より具体的な相互作用のあり方の影響があったかどうかを検討した。話しかけた経験があると回答した人には、何人の人に話しかけたか、そのうちの何人が話しかけに応じてくれたかを聞いている。そこで、それらの変数を投入した重回帰分析の結果が表3である。モデル1に「話しかけた人数」、モデル2に無視せずに「話しかけに応じてくれた人数」を投入した。モデル3の「話しかけ応答率」は、応じてくれた人数を話しかけた人数で割ったものである。

ここから見て分かるとおり、話しかけた人数よりも、その話しかけに応じてくれた人数の効果のほうが大きく、応じてくれた人数が多いほど、ポジティブ度も高く( $\beta=.62, p<.01$ )、他者への態度も肯定的になっていたことが分かった( $\beta=.46, p<.05$ )。話しかけ応答率も、ポジティブ度に対しては有意な効果を持っていた( $\beta=.69, p<.01$ )。ここから、多くの人に話しかけても、それが会話につながるとは限らず、相手が無視せずに応じてくれた場合には、ポジティブ度も高くなり、他者に対しても肯定的態度を持つようになるということが分かった。逆に言うと、話しかけても無視をされて応じてくれなかった人が多

表3 相互作用の成否が及ぼす影響

	ポジティブ度			他者への肯定的態度		
	モデル1	モデル2	モデル3	モデル1	モデル2	モデル3
話しかけた人数	.41	—	—	.45 <sup>†</sup>	—	—
話しかけに応じてくれた人数	—	.62 <sup>**</sup>	—	—	.46 <sup>*</sup>	—
話しかけ応答率	—	—	.69 <sup>**</sup>	—	—	.18
外向性	.11	.18	.55 <sup>*</sup>	-.08	.03	.17
協調性	-.15	.03	.40 <sup>†</sup>	-.14	.07	.20
勤勉性	.42	.34	.17	.21	.10	.04
神経症傾向	.16	.01	.12	-.37	-.46 <sup>†</sup>	-.32
開放性	-.23	-.10	.05	.11	.24	.26
性別ダミー(0=男性/1=女性)	-.20	-.09	.08	.31	.40 <sup>†</sup>	.42
$R^2$	.31	.53 <sup>*</sup>	.49	.38	.43	.27
調整済み $R^2$	.02	.33	.28	.13	.20	-.03
$n$	25	25	25	25	25	25

<sup>†</sup>  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ 

いほど、ポジティブにならないということである。

#### 4. 考察

Epley & Schroeder(2014)の実験2aを日本で追試し、見知らぬ他者との相互作用が、ポジティブな心理的影響をもたらすのかどうかを検討した。その結果、つながり条件、ひとり条件、統制条件の条件間の差としては、はっきりとした有意差は見られなかった。ただし、ポジティブ度、他者一般への肯定的態度のいずれにおいても、ひとり条件<統制条件<つながり条件の順で高くなり、Epley & Schroeder(2014)の結果と一致するパターンは得られた。

実際におこなわれた相互作用の種類や、話しかけた人数などが、ポジティブ度、他者への肯定的態度の双方に対して、どのように影響するのかをさらに検討したところ、話しかけに応じてくれた人数が大きな効果を持っており、単に話しかけただけでなく、それが相互作用として成立する必要があることが分かった。

なぜ、Epley & Schroeder(2014)の実験では、つながり条件とその他の条件で明らかな結果が得られ、今回の日本における実験では得られなかったかについて考えると、見知らぬ他者との相互作用についての記述的規範が異なり、アメリカ人のほうが気楽に相互作用を始めることができたため、相互作用がすぐに開始され、内容も濃いものになったから、と言えるだろう。実際に、Epley & Schroeder(2014)の実験2aでは、つながり条件の参加者は、平均9.8分もの長い間、見知らぬ他者と会話していたのに対し、本研究のつながり条件の参加者がおこなったことは、主に「あいさつをしたら、あいさつが返ってきた」という類のものであった。これが、つながることの効果を弱めていた可能性が高い。

見知らぬ他者との相互作用が及ぼす心理的影響

もう1つは、分析からも明らかになったとおり、実験参加者から働きかけても、相手が応じてくれないという経験をした人が多かった点である。実際に、話しかけ応答率が100%でない人(話しかけた人の内、少なくとも1人には無視をされた人)は、他者に話しかけた25名中、13名もいた。つまり、半数の人は、話しかけても相互作用とならなかった経験をもっていたことになる。

このような見知らぬ他者との相互作用をおこなう困難さが、相互作用の質、量を薄めてしまい、条件間の差が見られなかったと考えられる。しかし、Epley & Schroeder (2014) とパターンは一致していたこと、話しかけに応じてくれた人数が多いほど、経験がポジティブになり、他者一般に対しても肯定的になっていた点から、日本人も、決して外集団メンバーとは相互作用をおこないたくないのではなく、実際に相互作用をおこなえば、よい心理的影響があることは明らかになったといっていよう。

ここで、日本人は見知らぬ他者とあまりかかわらないという事実(Harihara, 2011; Patterson et al. 2007)について考えてみると、相互作用をおこなう機会が少ないため、他者一般に対して肯定的態度を形作ることができていない、という可能性が浮かび上がってくる。日本人は、アメリカ人に比べて、一般的信頼が低く、見知らぬ人どうしでは協力行動をおこないにくいことが明らかになっているが(e.g., 山岸, 1998)、それが、他人の邪魔をしてはいけないという強い儀礼的無関心の規範によって強化されている可能性もあるだろう。今後の検討課題としたい。

## 注

- (1) 実験参加者の性別、年齢以外の属性は取得しなかったが、当該大学の特徴として、東京近郊出身者が多く、海外在住経験がある学生が特段多いという特徴はない。
- (2) 参考のために、通学途中でおこなった行為について「友達と挨拶以上の会話」「電話で誰かと会話」「メール・SNSで誰かとやりとり」「インターネット閲覧」「読書」「音楽等を聴く」「睡眠」「考え事」「課題・勉強」「その他」のあてはまるものに○をつけてもらうことで尋ねたが、行為の有無と条件に関連が見られたのは、「メール・SNSで誰かとやりとり」のみであった( $\chi^2(2)=6.45, p<.05$ )。残差分析の結果、統制条件で「メール・SNSで誰かとやりとり」をおこなった人が期待度数よりも少ない(28.6%)ということが分かった。実験についての情報をSNSで流さないようには教示したが、統制条件以外で普段と異なる行為を指示したことで、若干SNS利用を促進した可能性はある。ただし、この「メール・SNSでのやりとり」は、従属変数であるポジティブ度にも他者への肯定的態度にも影響していなかった。
- (3) この3名を除いた分析もおこなったが、結果は大きく変わらなかった。
- (4) Epley & Schroeder (2014) は、SPANE (Diener et al., 2010) は用いず、'happy'1項目から'sad'1項目を引いたものをポジティブ感情の指標としている。
- (5) この指標の作成方法は、Epley & Schroeder (2014) にならったものである。

引用文献

- Diener, E., Wirtz, D., Tov, W., Kim-Prieto, C., Choi, D., Oishi, S., & Biswas-Diener, R. (2010). New well-being measures: Short scales to assess flourishing and positive and negative feelings. *Social Indicators Research*, 97, 143-156.
- Epley, N., & Schroeder, J. (2014). Mistakenly seeking solitude. *Journal of Experimental Psychology: General*, 143, 1980-1999.
- Goffman, E. (1963). *Behavior in public places: Notes on the social organization of gatherings*. The Free Press.
- (E.ゴッフマン(丸木恵祐・本名信行(訳)(1980). 集まりの構造—新しい日常行動論を求めて(ゴッフマンの社会学 4) 誠信書房)
- Harihara, M. (2011). *Interaction among strangers on subways: Comparative study in Japan, Korea, and the United States*. Poster session presented at the 9<sup>th</sup> Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology, Kunming, China.
- Lee, R., Draper, M. & Lee, S. (2001). Social connectedness, dysfunctional interpersonal behaviors, and psychological distress: Testing a mediator model. *Journal of Counseling Psychology*, 48, 310-318.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 小塩真司・阿部晋吾・カトロニ ビノ (2012). 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み パーソナリティ研究, 21, 40-52.
- Patterson, M. L., Iizuka, Y., Tubbs, M. E., Ansel, J., Tsutsumi, M., & Anson, J. (2007). Passing encounters East and West: Comparing Japanese and American pedestrian interactions. *Journal of Nonverbal Behavior*, 31, 155-166.
- Sandstrom, G. M., & Dunn, E. W. (2013). Is efficiency overrated? Minimal social interactions lead to belonging and positive affect. *Social Psychological and Personality Science*, 5, 437-442.
- Sumi, K. (2014). Reliability and validity of Japanese versions of the Flourishing Scale and the Scale of Positive and Negative Experience. *Social Indicators Research*, 118, 601-615.
- 山岸俊男 (1998). 信頼の構造：心と社会の進化ゲーム 東京大学出版会.
- Yamagishi, T., & Yamagishi, M. (1994). Trust and commitment in the United States and Japan. *Motivation and Emotion*, 18, 129-166.

〔武蔵大学准教授・元本学現代教養学部特任講師(社会心理学) 2015 年度個人研究員〕